

# 『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.23

Feb. 2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .

(みんな“法華経観”を見つける旅に出よう)

## 『妙法蓮華経 分別功德品第十七』 (本門・正宗分 / 流通分)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 法師品 二〇九頁三行

○ 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

### <如来寿量品(後半—『自我偈』)の復習>

・現象を実在と見る誤り (P193・4行/P139・4行)

凡夫の最大の欠点は、「目に見えるものしか実在しないと思うこと」です。この誤りから全ての誤りが出発し、全ての不幸が展開していくのです。～それで、仏さまは、この世のすべての現象は『因(ある原因)と縁(ある条件)が結びたて生じた仮のあらわれにすぎない』ことを教えられました。

・なぜ良薬を飲まないか (P197・1行/P141・終5行)

五官の楽しみに溺(おぼ)れている人間にとって、仏さまの戒めや教訓は窮屈でたまらなく感じられ～人のために尽くす菩薩行などバカバカしいとしか考えられないからです。

・自行の必要 (P198・8行/P142・終4行)

人間にとって、自分自身でものごとをすることが、何より大切です。信仰は絶対にそうでなくてはなりません。～自分で求め、自分でつかんで行ってこそ、本当に身に付くのです。

『尋いで便ち來り歸って咸く之に見えしめんが如し』 (二七八頁 終行)

・ふたたび仏を見る (P199・終5行/P143・8行)

いったんは見失ったようでも、教えを正しく信受すれば、仏さまはその瞬間に我々のところへ帰ってこられるのです。真の親としていつまでも一緒に暮らし、我々を守ってくださるのです。～言うに言われぬ『慈悲の心』が満ち溢れていることを、よく感じ取らなければならないと思います。

『顛倒の衆生をして近しと雖も而も見ざらしむ』 (二七九頁 終二行)

・**宗教の極致** (P207・3行/P149・終5行)

(自らのものの見方が) 顛倒であると悟っていれば、相変わらず「目に見えるもの」のみを対象としていても、心は常に仏さまの方を向いています。～ それが完全にできるようになった時、はじめて人間の『仏性』が燦然(さんぜん)として輝き出してくるのです。これが、『宗教の極致』といってもいいでしょう。

『衆生既に信伏し 質直にして意柔輒に一心に佛を見たとまつらんと欲して自ら身命を惜ま  
ず 時に我及び衆僧 俱に靈鷲山に出ず』 (二八〇頁 一行)

『阿僧祇劫に於て 常に靈鷲山及び餘の諸の住處にあり』 (二八〇頁 終五行)

『衆生劫盡きて 大火に焼かるると見る時も 我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり～  
曼陀羅華を雨らして 佛及び大衆に散ず』 (二八〇頁 終五行)

衆生は、この世は時代が終わり、大火に焼き尽くされる『苦の世界』だと見えるのですが、じつはこの世は仏の教えによって救われ、天人が充滿して、そればかりか曼陀羅華の花びらが仏および衆生に平等に降り注がれているのです。

『我が浄土は毀れざるに 而も衆は焼け盡きて 憂怖諸の苦惱 是の如き悉く 充滿せりと見る』  
(二八〇頁 終行)

『諸の有ゆる功徳を修し 柔和質直なる者は 則ち皆我が身 此にあつて法を説くと見る』

(二八一頁 三行)

世のため、人のためになる精進を修め、功徳を積み、心が柔和で正直で素直な人は、すぐに私(仏)を見ることができるのです。

『佛語は實にして虚しからず』 (二八一頁 終五行)

『我も亦爲れ世の父 諸の苦患を救う者なり 凡夫の顛倒せるを爲て 實には在れども而も減す  
と言う』 (二八一頁 終三行)

『我常に衆生の 道を行じ道を行ぜざるを知つて 度すべき所に随つて爲に種種の法を説く』

(二八二頁 一行)

『毎に自ら是の念を作す 何を以てか衆生をして 無上道に入り 速かに佛身を成就することを 得せしめんと』 (二八二頁 二行)

・**如来寿量品は法華經の精髓** (P232・3行/P169・終2行)

如来寿量品によって、我々が知ることができたのは――

- 第一に、仏さまの本体は「久遠実成の本仏 (宇宙の大生命)」であり、常にこの世に住していること。
- 第二に、本仏は我々といつかなる時でも共にいて、常に我々を生かして下さっているということ。
- 第三に、仏と衆生は親子なのだから、我々もまた、「永遠に生き通し」なのであるということ。

以上のことを自覚し、しっかりと胸のなかに確立すれば、我々の人生は実に明るい、不安のない、しかも勇氣と積極性に溢れるものとなるのです。

『如来寿量品』が『法華經』の精髓であり、一切經の魂であるとされているゆえんは、このところにあるのです。



## <分別功德品のあらすじ>

[二八三頁一行] 『如来寿量品』の説法によって①『仏の寿命』は永遠であり、②『仏の本体』が不生不滅の存在であること。そして、③仏は『あらゆるところで私たち一人ひとりを常にお導きを下さっている』こと。さらに④釈迦牟尼如来が、『なぜ、入滅されなければならないか』の理由をはっきりと説き明かされ、そのことを伺った無量無辺阿僧祇（あそうぎ）という無数の衆生は、心に大きな安心と安穩（あんのん）の思いに包まれて、大いなる功德を得ることができたのでした。

### 【『仏の無量寿(久遠実成)』であることを確信して得られる功德とは】——

[二八三頁二行] すると世尊は弥勒菩薩に向かって、次のようにお告げになりました。

「阿逸多(あいつた・弥勒菩薩のあだ名)よ。私の寿命が無量であることを聞いて、このことを心から信受した六百八十万億那由他恒河沙（なゆたごうがしゃ）という無数の衆生は、①『空』をしっかりと悟り、人生の様々な変化にとらわれない安穩（あんのん）の境地『無生法忍・むしょうぼうにん』を得ることができました。またその千倍の数の菩薩たちは、②教えを聞くことによってあらゆる悪をとどめ、あらゆる善行を行う力『聞持陀羅尼門・もんぢだにもん』を得ることができました。さらに一つの星を粉末にした数ほどの無数の菩薩たちは、③自ら願って法を説き弘め、いかなる妨害（ぼうがい）にも負けずに自由自在に法を説く力『樂説無碍弁才・ぎょうせつむげべんさい』を具えることができました。また無数の菩薩たちが④すべての悪を押しとどめ、あらゆる善行を行う力を、次から次へと無限に広めて行く力『旋陀羅尼・せんだに』を得ることができました。そして三千大千世界の星を粉末したほどの数である三千大千世界微塵数（みじんじゆ）という計り知れない数の菩薩たちは、⑤どんな困難があっても一歩も退（しりぞ）かず、あらゆる障害に負けることなく法を説き続ける力『不退の法輪を転ず・ふたいのほりんをてんず』を得ることができました。また二千中国土微塵数（ちゆうこくどみじんじゆ）という無数の菩薩たちは、⑥回ひとつ報いを求める心がなく、清らかな心で法を説く境地『清浄の法輪を転ず（しよじよのほりんをてんず）』を得ることができました」

[二八三頁 終三行] 「またその数よりはやや少ない一国土（しよせんこくど）微塵数（みじんじゆ）という数の菩薩たちは、⑦八回生まれ変わったのちに仏の悟りを得ることができる『八生（はっしょう）に當（ま）さに阿耨多羅三藐三菩提を得（う）べし』保証を頂きました。そして、世界の中心にそびえる最高の山・須弥山（しよみせん）のふもとの四方の世界を四倍にした国土を粉末にした数である四四天下（ししてんげ）微塵教（みじんじゆ）という無数の菩薩たちは、⑧四回生まれ変わったのちに仏の悟りを得ることができる『四生（ししょう）に當（ま）さに阿耨多羅三藐三菩提を得（う）べし』保証を得ました。そしてその数よりも少ない三四天下（さんしてんげ）微塵教（みじんじゆ）という数の菩薩たちは、⑨三回生まれ変わったのちに仏の悟りを得ることができる『三生（さんしょう）に當（ま）さに阿耨多羅三藐三菩提を得（う）べし』保証を得ました。またそれよりも少ない二四天下（にしてんげ）微塵教（みじんじゆ）という無数の菩薩たちは、⑩二回生まれ変わったのちに仏の悟りを得ることができる『二生（にしょう）に當（ま）さに阿耨多羅三藐三菩提を得（う）べし』保証を得ました。そしてさらに少ない一四天下（いっしてんげ）微塵教（みじんじゆ）という数の菩薩たちは、⑪たった一回生まれ変わるだけで仏の

悟りを得ることができるという《一生(いっしょう)に当(ま)に阿耨多羅三藐三菩提を得(う)べし》保証を得たのでした。さらには八つの世界を粉末にしたほどの数の衆生が、**⑫みな仏の悟りを得る志**《阿耨多羅三藐三菩提の心を発(おこ)しつ》を起こすことができたのでした」

### 【『仏の無量寿(久遠実成)』が説かれ、天地が歡喜し、奇瑞が現われる】——

【二八四頁 四行】『**仏の寿命**』は永遠であり、『**仏の本体**』が不生不滅の存在であることを確信することによって得る甚大(じんだい)な功德を、仏さまが諸々の菩薩たちに説かれると、／『**虚空(こくう)の中より曼陀羅華(まんだらけ)・魔訶(まか)曼荼羅華を雨(ふ)らして**』 天空から美しい曼陀羅華(まんだらけ)や摩訶曼陀羅華(まか まんだらけ)の花びらがヒラヒラと舞い降(お)りてきました。また無量百千万億という無数の宝樹(ほうじゆ)にある師子座(ししざ)に端座(たんざ)している十方分身仏(じっぽう ぶんじんぶつ)の上にも降り注がれるのでした。そしてその美しい花びらは七宝(しっぽう)に輝く多宝塔におられる釈迦牟尼仏と多宝如来にも散じられるのでした。そればかりか、／『**亦(また)一切の諸(もろもろ)の大菩薩および四部(しぶ)の衆に散ず**』 この法会(ほうえ)にいる**すべての大菩薩、あらゆる出家・在家の信仰者たちにも、等しく散じられるのでした。**

【二八四頁 終五行】梅檀(せんだん)や沈水香(じんすいこう)の香りの香水が雨のように降り注がれ、天空では天の鼓(つづみ)がひとりでに鳴り出し、その妙(たえ)なる調(しら)べが世界中に響きわたりました。さまざまな天の衣(ころも)がヒラヒラと舞い、瓔珞(ようらく)や真珠をはじめとする様々な珠玉(しゆぎよく)を連ねた装飾が、四方八方、天空すべてに飾られました。また宝石を散りばめた数々の香炉(こうろ)には、値(あた)いをつけられない貴重な香がたかれ、その香(かお)りは法会(ほうえ)全体を包み込みました。こうして仏さまと仏さまの教え、さらにその教えを聴聞(ちようもん)する人々に対して平等に、『感謝と帰依』の供養が表されたのでした。

【二八四頁 終五行】 仏さま一人ひとりの頭上には、お付きの菩薩たちが天蓋(てんがい)や幟幡(のほりばた)をかかげ、その高さは天上界の梵天(ぼんてん)にまで達しています。そしてそれらの菩薩たちは、仏さまを讃(た)える歌を朗々と歌っています。

### 【『仏の無量寿(久遠実成)』を確信して得られる功德を、弥勒菩薩が復唱】——

【二八五頁 一行】 その神秘的な場面を目(ま)の当たりにした**弥勒菩薩**は、やおら座から立ち上がり、相手を讃える作法である右の肩を肌脱ぎし、合掌して仏さまを礼拝しました。そして偈(け)を説いて次のように申し上げたのでした。

【(偈)二八五頁 四行】 「世尊は、『**仏の寿命**』は永遠であること、そして『**仏の本体**』が不生不滅の存在であることを説かれました。この教えは未(いま)だかつて伺ったことのない教えです。私たちは世尊が一切衆生を救い切る大なる力をお持ちになり、そして寿命が永遠であることを知ることができました。これによって無数の仏弟子たちは、／『**世尊の分別して 法利(ほうり)を得(う)る者を説きたもうを聞いて 歡喜(かんぎ) 身に充徧(じゅうへん)す**』 世尊が説く教えを聴聞することによって得る甚大な功德を伺い、身にあられる歡喜を覚えています」

そして**弥勒菩薩**は、先にお説きになられた**①～⑫**までの大功德の素晴らしさを復唱して申し上げ、今、目の前に繰り広げられる曼陀羅華(まんだらけ)・摩訶曼陀羅華(まかまんだらけ)が天空

から降り注がれる荘厳な奇瑞(きずい)を讃歎したのでした。

さらに弥勒菩薩の偈は続きます。

【(偈)二八頁 終二行】「この神秘的な情景は、未だかつて経験したことのない素晴らしい情景です。このような奇瑞(きずい)が起きたのは、一切衆生が『仏の寿命は永遠であるということ、そして『仏の本体が不生不滅の存在であることを伺って心から歓喜したためであると存じます。仏さまのご高名(こうめい)は広く十方世界にとどろき、あらゆる衆生は大きな功德を得ることができました。／『一切善根を具(ぐ)して以て無上の心を助く』おかげさまで一切衆生は、善根(ぜんこん)を具えるようになり、それによって無上道を成就しようという固い決心ができました」

【二八頁 三行】すると世尊は弥勒菩薩に次のように語りかけられたのでした。それは何かと申しますと、【四信五品・しんごほん】と言って、①『仏の在世中における大切な4段階の信仰の在り方・功德』である【在世の四信・さいせのしん】と、②『仏の滅後における大切な5段階の信仰の在り方・功德』である【滅後の五品・めごのごほん】について説かれたのでした。

はじめに『仏の在世中における大切な4つの信仰の在り方・功德』について説かれました。

【在世の四信・さいせのしん】 —

①《一念信解・いちねんしんげ》 —

【二八頁 三行】「阿逸多(あいつた・弥勒菩薩の異称)よ。もし、ある者が仏の在世中に仏の寿命が無量であることを聞き、そのことをほんの一念でも信解するならば、その者が得る功德は計り知れません。それは信仰心の篤(あつ)い善男子・善女人が八十億那由他劫(なゆたこう)という気の遠くなるような長い時間、六波羅蜜の『智慧』の徳目を除く『五波羅蜜』を行じたとしましょう」

【(偈)二八頁 一行】「たとえば仏と縁覚、菩薩に対して珍味や最上の衣服を捧げ、また法を説くための精舎を建設するなどの様々な『布施』の行を、一劫という長い時間、尽きることなく続けたとしましょう。【(偈)二八頁 四行]また『持戒』の行を重ねたために清浄の身となって煩惱を滅し、そしてそのことを諸仏が一斉に讃歎してくれるまでに極めたとしましょう。【(偈)二八頁 五行]さらに『忍辱』の行では、常にあらゆる縁と調和し、たとえ悪の仕打ちを受けることがあってもまったく動揺することなく、法を軽んじる増上慢の者たちから軽蔑(けいべつ)・侮辱(ぶじよく)・罵倒(ばとう)されても、まったく平静でいることができるようになったとしましょう。【(偈)二八頁 終五行]また『精進』の姿勢では、仏法を求める志が大変固く、無量億劫という果てしない期間、一心に修行して怠るということがなく、無数劫(むしゅこう)という長い期間、静寂な場所で瞑想に入り、経行(きょうぎょう)という歩きながら思索(しやく)を深め、睡眠の時間を切り詰めてまでも心を尽くして精進したとしましょう。【(偈)二八頁 終三行]そしてこのような修行の結果、様々な『禪定』の境地に達し、八十億万劫という長い年月、心が安定して乱れることがなく、多くの功德を積んで仏の境地を求め、『諸法の実相を見極め、一切の智慧を得て禪定の境地に至る』ことを願って精進したとしましょう。このように善男子・善女人が百千万億劫という無限の年月、以上の徳行を修めたならば、これは大変すばらしい修行をしたこととなります」

## 【《一念信解》の功德】——

【二八七頁 六行】「そして、この『五波羅蜜』の行によって得る功德は、大変大きな功德であるのですが、『仏の寿命は永遠』であることをほんの一念でも知ることによって得られる功德と比べると、／（『百分・千分・百千萬億分にして其の一にも及ばず。乃至（ないし）算數（さんじゆ）・譬論（ひゆ）も知ること能（あた）わざる所なり』）それは百分の一、千分の一、百千万億分の一にも及びません。『仏の寿命は永遠』ということを一念でも信じる功德は、計算しても計り知ることのできない甚大（じんたい）な大功德なのです」

【(偈)二八九頁二行】（『我が壽命を説くを聞いて乃至（ないし）一念も信ぜば其（そ）の福彼（ふく）かれに過ぎたらん』）「しかも善男子・善女人が、『仏の寿命』は永遠であること、そして『仏の本体』が不生不滅の存在であることを一瞬でも信じたならば、その人が受ける功德は、比較にならないほど尊く素晴らしいものです」

【(偈)二八九頁三行】（『悉（ことごと）く一切の諸（もろもろ）の疑悔（ぎげ）あることなくして深心（じんしん）に須臾（しゆ）も信ぜん其（そ）の福此（ふく）かくの如くなることを爲（い）』）「ですからこの教えに対して一切の疑いを持ってはいけません。わずかなひと時でも深く信ずることです。それによって誰も計り知れない功德を得ることができるのです」

【(偈)二八九頁五行】（『其（そ）れ諸（もろもろ）の菩薩の無量劫に道（どう）を行ずるあつて我が壽命を説くを聞いて是れ則（すなわ）ち能（よ）く信受せん』）「特に菩薩たち、つまり無量劫という長い期間、菩薩行を行ってきた者たちは、『仏の寿命は永遠』であるということを知ると、すぐに信受することができでしょう。そしてそのような人たちは『この教えを頂いたからには、自分も仏の無量寿（仏の寿命は無量の意味）を得て、衆生を救って行こう』と願いを起こすに違いありません。それは私が釈迦族の王となるために生まれながら、こうして悟りを得て法を説いているのと同じように、『自分も一切の人々の導師として仰がれるように成り、仏の無量寿を説かせていただく』という願いを起こすことでしょう。この教えを深く信受する者は、心身が清浄で素直で正直であり、教えを聞くとたちどころに理解して、悪をとどめて善を押し進める力を具えるようになります。／（『是（かく）の如き諸人等（しよにんら）此（ここ）に於て疑（うたがひ）あることなけん』）そして教えを疑うことなくしっかりと護持していきます」

## 【《一念信解》をしない者の誤り】——

【二八七頁 終三行】「もし仏の悟りを得ようと精進する善男子が、以上の大功德があることを知りながら『仏の寿命は無量』であることを信じないならば、それは羽根がなく空を飛ぼうとするようなもので、／（『是（こ）の處（ことわり）あることなけん』）まったく理屈に合わぬ愚かなことだと言えます」

## ②《略解言趣（りやくげごんじゆ）》——

【二九〇頁一行】（『又（また）阿逸多（あいつた）、若（も）し佛の壽命長遠（じゆみようじょうおん）なるを聞いて、其の言趣（ごんじゆ）を解（げ）するあらん。～能（よ）く如來の無上の慧（え）を起（おこ）さん』）「阿逸多（あいつた）よ、『仏の寿命』は永遠であることを理解し、それを深く信受するならば、その人の得る功德は計り知れなく無限であり、仏と同じく無上の智慧を得ることができでしょう。そして、仏

の智慧の中で、全てが平等である『慧』を得ることができるようになります」

### ③《広為他說・いいたせつ》——

【二九〇頁 二行】「ましてやこの教えを聞いて多くの人々にも教えを聞かせ、自分のみならず他の人々にもお経の書写を行うようにすすめて、花や香、香水を注ぎ、天蓋（てんがい）や幟幡（のぼりばた）などを設（しつら）えて經典を供養し、教えをしっかりと護持していくならば、その者の受ける功德は無量です。／（『能（よ）く一切種智（いっさいしゅち）を生ぜん』）そしてついには、一切の違（ちが）いを見抜くことのできる『智』を得ることができるでしょう」

### ④《深信観成・じんしんかんじょう》——

【二九〇頁 六行】「阿逸多（あいつた）よ。もし、ある者が『仏の寿命』が無量であることを一念ではなく、深く信解するならば、その人は、私が靈鷲山で大菩薩たちや多くの者たちに法を説いている情景を見ることができるようでしょう。そしてこの娑婆世界が瑠璃（るり）などの宝石で作り上げられ、全ての地形が平たんで、美しい木々が立ち並び、宝玉（ほうぎょく）でできた建物が連なり、そこに多くの菩薩が住んでいるありさまを見ることでありましよう。このような様相を見られるようになったのは、深い信仰心によるもので、これを『深信解の相・じんしんげのそう』といいます」

—— 【在世の四信・さいせのしん】

次に世尊は『仏の滅後における大切な五つの信仰の在り方・功德』について説かれました。

### —— 【滅後の五品・めつごのごほん】

#### ①《初随喜・しよれき》——

【二九〇頁 終行】「また、仏の滅度にこの教えを聞いて、疑うことなく素直に有難いと随喜（ずいき）の心を起こすならば、それこそそれが真の信仰の姿であり、これも先に述べたものと同じ『深信解の相・じんしんげのそう』であると言えます」

#### ②《読誦・どくじゆ》——

【二九一頁 二行】（『斯（こ）の人は則（すなわ）ち爲（こ）れ如來を頂戴したてまつるなり』）「ましてやその教えを読誦し、よく受持する者は、如來と共にあるようなものです」

【二九一頁 三行】「阿逸多よ。もはやこのような人々は私のために仏塔や寺院を建てる必要はありません。僧房（そうぼう）を作り、衣服や飲食などを寄進する必要もありません。なぜならば、この教えを受持すること自体が仏塔や寺院を建て、様々な供養をしたことと同じにほかならないからであります。このように教えをしっかりと受持して經典を読誦することは、仏舍利を祀（まつ）って梵天（ぼんてん）の天上界にまで至る七宝（しっぽう）の塔を建て、さまざまな宝石や香を捧げ、美しい舞や音楽を奉納することを無量千万億劫の長い期間行うことと同じ価値があります」

### ③《説法・せっぽ》 —

【二九一頁 終三行】「阿逸多(あいた)よ。私の滅後において『仏の寿命が無量』であるというこの教えを聞いて、教えをしっかりと受持し、自分が行うだけでなく他の人々にもお経の書写をするように教えを説くならば、その人の功德というものは赤栴檀(しゃくせんたん)という貴重な香木で作られ、椰子(やし)の木の仲間の多羅樹(たらじゆ)という高木(こうぼく)の、八倍も高い殿堂を三十二棟も建てる功德と同様です。その一つひとつの殿堂は大変広く、荘厳で美しく、そこには大勢の比丘が住んでいます。また花園や体を清める池、歩きながら思索を深める経行(きょうぎょう)する道や、瞑想するための洞窟などもあります。そして衣食住の全てが整って何の心配もなく、僧房(そうぼう)や寺院の数は百千万億という無数にのぼります。そのような広大な殿堂を建てる功德と変わりはありません。ですから、私の滅後において『仏の寿命が無量』であるという教えを受持し、他の人々にも説き広めるならば、この様な殿堂や仏塔、寺院を建て、衆僧(しゆそう)を供養せずとも、同様の価値・功德があるのです。

### ④《兼行六度・けんぎょうど》 —

【二九二頁 六行】「いま説いたように、『仏の寿命が無量』であるという教えを受持し、教えを説き広める功德は誠に計り知れませんが、ましてやそれに合わせて(兼ねて)布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧という『六波羅蜜』を実践するならば、その功德は甚大で、東西南北、四維(しゆい)・上下へと無限に広がって行く無限の功德です。つまり『六波羅蜜』を根本的に、そして完全に行じて行くのですから、その人は当然の如くまっすぐに最高の智慧に到達できるわけです」

### ⑤《正行六度・しやぎょうど》 —

【二九二頁 終六行】「もしある人が、この教えを読誦し、受持し、人のために説き、そして自らのみならず他者にも書写するようにはたらきかけたとしましょう。そればかりか仏塔や僧房の建設をはじめ修行者に様々な供養を捧げたとしましょう。【布施】さらに多くの人々に菩薩を褒(ほ)めたたえ、自分の体験談などを用いて法華経の深い意味を説いたとしましょう。そして怒りや欲望に負けることのない強い心で心身ともに清らかになり、仏の戒めをしっかりと守り【持戒】、柔和な心でいつも他者と接し、どのようなことがあっても忍辱の姿勢を保ち【忍辱】、常に静かに心が平安に安定した禪定の境地であり【禪定】、精進・努力の姿勢を貫いて善い行いを実践し【精進】、仏の智慧を求めてやまず【智慧】、人からたとえ非難されても、またどんな質問を受けても正しく答えて行くことができる人は、完全に『六波羅蜜』を行じた人であると言えます。阿逸多よ。もし私の滅後において在家の信仰深い男女がこの法華経をしっかりと受持し読誦する行を深めて行くならば、素晴らしい功德を得ることができるのです。 / 『阿耨多羅三藐三菩提に近づいて道樹(どうじゆ)の下(もと)に坐せるなり』 そのような人は、すでに私がブツタガヤーの菩提樹下に坐して悟りを得ようとしている状態と同じであると言えます。その人はもはや最高の悟りに近いと言えるのです」

— 【滅後の五品・めつごのごほん】



【『仏の無量寿(久遠実成)』を信じ、『滅後の五品』を行ずる者のいる場所は、  
仏塔を建てて供養すべき尊い場】——

【二九三頁 七行】「阿逸多よ。『是(に)の善男子・善女人の若(も)しは坐し若しは立(りゅう)し若しは經行(きょうぎょう)せん處(ところ)、此の中には便(すなわ)ち塔を起(た)つべし。一切の天・人皆供養すること、佛の塔の如くすべし』)、【(偈)二九五頁 終三行】『莊嚴(しょうごん)し妙好(みょうこう)ならしめて種種(しゅじゅ)に以て供養すべし』】この人が立ち振る舞う全ての場所は、仏塔を建てて供養しなければならないほど尊い所であると言えます」

【『仏の無量寿(久遠実成)』を信じ、『滅後の五品』を行ずる者のいる場所は、  
いつも仏が共にいる】——

【二九三頁 終四行】すると世尊は、いま説かれた内容を『偈』を用いて復唱されました。

そして最後に次のように結ばれたのでした。

【二九五頁 終二行】『佛子此の地に住すれば則(すなわ)ち是(に)れ佛受用(じゅゆう)したもう常に其の中に在(ましま)して 經行(きょうぎょう)し若しは坐臥(ざが)したまわん』】「仏の教えをしっかりと信受している人が住むその場所は、仏もその場所を自分の住む場所としています。そしてその人と一緒に行動を共にしているのですと、仏が皆と共にあることを説かれたのでした。



いっほん に はん  
**一品二半**

法華經の要(かなめ)と言ってよい《本門・正宗分》が、『從地涌出品』の後半部分(二六五頁 五行～)と『如来寿量品』一品全体、そして『分別功德品』の前半部分(～二八七頁 二行)で説かれています。このことから《本門・正宗分》が一品と二品各品の半分を合わせた『一品二半(いっほん にはん)』と呼ぶようになりました。

るつうぶん まな こころ  
**流通分を学ぶ心がけ** (P283・3行/P209・4行)

「正しい信仰をもてば、どういふ結果が現われるか?」ということと「正しい信仰を持つには、どんな心がけが必要か?」ということが説かれています。そして、「その正しい信仰を、後の世までも説き広めよ」と世尊が我々に委嘱なさっておられるのです。

るつうぶん  
**流通分の大切さ** (P284・8行/P210・3行)

- ①身近な問題として、日常生活に即して説かれているため、教えがいきいきと感じられる。
- ②「正しい信仰を持ち、身に行なえば、現実にこういうふうに向上していくのだ」と説かれた経典を、常に読誦すれば、ゆるもうとする信仰心が、そのたびに引き締まってくるのです。
- ③仏さまは、我々にも、この教えを説き広めることを依頼してくださっているのです。有難いことです。我々は言い知れぬ励みを覚えるのです。大勇猛心をふるい起こすのです。

## 信仰しんこうにはかならずくどく功德がある (P235・1行/P171・1行)

自分は何のために生きているのかを考えようとしなない人は、今日は今日、明日は明日といった、のんきな気持ちでおられることありましょう。～ 一応、幸福な人間に考えられますが、その幸福は、まったく「自分だけの幸福」であり、「現世の生活においてだけの幸福」に過ぎません。そういう人は、この世で善業を積まず、価値の低い人生を送る人ですから、いつかは必ず不幸がやってくるに違いないのです。

(そういう薄っぺらな希望や自信ではなく)「どんな場合でも、自分は絶対の存在である仏さまに守られているのだ、生かされているのだ」という大安心の上に立っているのですから～ こういう心境に達しますと、我々の人生が見違えるほど変わってくるのは当然です。人生が変わらないということがあり得るはずがありません。必ず変わります。この「信仰によって心境が変わり、心境が変わることによって人生が変わる」ということを、『功德』というのです。ですから信仰には必ず功德があるわけです。～

功德は、単に心の上に現われるだけでなく、肉体の上にも、物質生活の上にも現われてくるものです。～ 心が変われば肉体も変わり、物質生活も変わってくるのは当然であって、何の不思議もありません。

本当の信仰に徹すれば、その人の持つ雰囲気が変わってきます。いかにも明るい、自身に満ちた、しかもすべてに積極的で献身的な気分を持つようになります。～ ですから、仕事もうまくいくようになり、したがって物質にも恵まれるようになるのは、ごく自然ななりゆきです。

～ 大乘仏教の理想は、あくまでも全人類が心安らかに、生活も豊かに、平和に暮らすというところにあるのですから、心さえ清らかであればどんな貧乏であってもいいという考え方は、大乘仏教の第一義ではないのです。この点は、よく心得ておく必要があります。

### 《しんがい患惟のひととき ①》

「自分の幸せだけで生きる人は、この世で善業を積まないために、いつかは必ず不幸がやってくる」、「どんな場合でも、絶対に仏さまに守られているという心境に達すれば、人生は必ず変わる」、「信仰によって心境が変わり、心境が変わることによって人生が変わる」ということを『功德』というのです」と庭野開祖は説きます。

— では、「自分の信仰による功德は如何か？」を振り返り、

①そのうえで、「果して自分は、仏さまに守られているという心境に達しているか?」

②そして、「仏さまに守られているということを感じ、それによって、心境が変わり、人生は変わった」と感じ取れているか? また、「心安らかに、生活も豊かに、平和に暮らす」という『大乘仏教の理想・第一義』の生活を送れているか? 振り返ってみましょう。

## くどく 功德はあくまでも結果である

(P241・2行/P175・7行)

大乘的信仰の結果（現われてきた功德）は、素直に、ありがたく受け取ればいいのです。なにも「信仰は心だけの問題だから、その他の功德は、一切不要だ。信仰生活が不純になるから…」などと、かたくなな考えを持つ必要はありません。～

信仰に入る人は、多くの場合なんらかの悩みを持っているものですから、その悩みから逃れたいと思うのは当然であり、とがむべき筋は少しもありません。～

現在の苦しみ・悩みはいちおう差し置いて、久遠実成の本仏である仏さまに何もかもお任せしてしまうという無我の心境にはいることができた時にこそ、心は自由自在を得、苦しみ・悩みは向こうの方で消えていってくれるのです。

また、（しかし方では）現世利益だけを目的として信仰する人は、すぐに退転しやすい人です。なぜならば、仏さまを信じ切っていないからです。それゆえ、目の前のことしか考えられず、すぐハッキリした功德が現れなければ、教えに対して疑いを起こしたり、飽きたりするのです。

### 《患惟のひととき ②》

「現世利益だけを目的として信仰する人は、すぐに退転しやすい人です」と庭野開祖は説きます。— では私の信仰は「現世利益だけを目的」としてはいないか？ を振り返り、「私の信仰の目的は、『何を』目的としているか？」を振り返ってみましょう。

### 《患惟のひととき ③》

庭野開祖は、「現在の苦しみ・悩みはいちおう差し置いて、久遠実成の本仏である仏さまに何もかもお任せしてしまうという無我の心境にはいることができた時にこそ、心は自由自在を得、苦しみ・悩みは向こうの方で消えていってくれるのです」と説きます。

— この庭野開祖の教えをあなたはどのように受け止めますか？

### 《患惟のひととき ④》

「本当の信仰に徹すれば、明るい、自身に満ちた、しかもすべてに積極的で献身的な気分を持つようになる。ですから、仕事もうまくいくようになり、したがって物質にも恵まれるようになるのは、ごく自然ななりゆきです。大乘仏教の理想は、あくまでも全人類が心安らかに、生活も豊かに、平和に暮らすというところにある」と庭野開祖は説きます。

— この教えをあなたはどのように受け止めますか？。 しみ締めてみましょう。

ほとけ むりょうじゆ かくしん え くどく  
**仏の無量寿を確信して得られる12の功德** (P245・6行/P177・終2行)

- ①「無生法忍・むしょうぼうにん」 「不生不滅」を知り、人生の「変化」にとらわれない。
- ②「聞持陀羅尼門・もんじだらにもん」 教えを受持して、悪を止め、善を進める力を得る。
- ③「楽説無礙弁才・ぎょうせつむげべんざい」 自ら喜んで法を説き、如何なる妨害にも負けず、どんな相手をも説得できる力。
- ④「旋陀羅尼・せんだらに」 あらゆる悪を止め、あらゆる善を進める力を無限に広げて行く。
- ⑤「不退の法輪を転ず・ふたいのほうりんをてんず」 どんな困難があっても、一步も退くことなく教えを説き広めていく。
- ⑥「清浄の法輪を転ず・しょうじょうのほうりんをてんず」 何一つ『報いを求める心』もなく、純真に法を説き、菩薩行を行う。

⑦ ~ ⑪「当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし(八生・四生・三生・二生・一生)」

(八度生まれ変わり、四度～二度生まれ変わり、いや、たった一生の間で) 仏の悟りを得る。

⑫「八世界微塵数の衆生あって、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を発しつ」

数限りない衆生が、みな仏の悟りを得ようという志を起こす。

「仏の寿命が無量(久遠実成)であることを信解すると①～⑫の功德を得ることができる」と世尊はお説きになられました。⑦～⑫は究極的な功德ですが、特に①～⑥の功德は「今世」において、私たちが実際に得ることを目指したい徳目・功德です。

《思惟のひととき ⑤》

「仏の寿命が無量(久遠実成)であることを信解すると①～⑫の功德を得ることができる」と世尊はお説きになられました。⑦～⑫は究極的な功德ですが、特に①～⑥の功德は「今世」において、私たちが実際に得ることを目指したい徳目・功德です。

— では、「今世」におけるこの①～⑥の功德の中で、私は「どの徳目を、身に付けているか?」、または、「これから、どの徳目を身に付けたいと思っているか?」  
かみ締めてみましょう。

(P257・4行/P188・1行)

仏さまの寿命が無量であるということは、つまり、我々が何度生まれ変わっても、常にこの世におられて正法へと導いて下さるということです。それがわかりますと、今まで、仏の智慧などという及びもつかぬものだと思っていたのが、「そうではない、一心に求めさえすれば、生き変わり死に変わりするうちに、いつかは得られるものだ」ということがわかりますから、「自分もそれを求めて修行しよう」という心が起こります。

## 《<sup>しんがい</sup>患難のひととき ⑥》

「仏さまの寿命が無量であるということは、つまり、我々が何度生まれ変わっても、常にこの世におられて正法へと導いて下さるということです」と、庭野開祖は説きます。  
—このことを、あなたはどのように受けとめますか？ かみ締めてみましょう。

### 生きがいを知る<sup>しん</sup>大<sup>だいくどく</sup>功德 (P260・7行/P189・2行～P280・1行/207・終行)

われわれは、この世限りで終わりになるものではありません。次の世、また次の世と生まれ変わっていくのです。様々な事件に、喜びつ悲しみつ、を繰り返すばかりだ…ということが判れば、誰だって考えただけでウンザリしてしまうでしょう。～ 真の信仰を持ち得た者は、常に一歩ずつでも「仏の境地」へ近づいて行くよう、充実した生き方をしようとします。仏教の信仰者だけが得られる「大功德」というべきでありましょう。

～ 仏寿の無量（久遠実成）を知ることによって、仏さまは常に我々と共にいて下さることを知ると、どうしても、「善い心を持ち」、「善い行い」をせざるを得なくなります。

～ 五十年なり七十年なりの一生を終わったら、全ておしまい、というのであれば、人によっては「少々よくないことをしてでも、その期間だけを楽しみ、おもしろおかしく送ればいいのだ」という気持ちになることもありましょう。～ 仏さまはいつも仏の境地へと導いてくださるのに、次の世もまた次の世も、自分はいつまでも六道を輪廻し続けなければならないと気づけば、我欲にとらわれた人生を送ることが恐ろしくなります。そして少しでも「善い心を持ち・善い行い」をすることの大切さに気がきます。

## 《<sup>しんがい</sup>患難のひととき ⑦》

以上の教えを通して、私は自分の人生を「どのように生きて行こう」と考えるか？  
みんなで話し合ってみましょう。

特に「真の信仰を持ち得た者は、常に一歩ずつでも「仏の境地」へ近づいて行くよう、充実した生き方をしようとします」。「次の世もまた次の世も、自分はいつまでも六道を輪廻し続けなければならないと気づけば、我欲にとらわれた人生を送ることが恐ろしくなります。そして少しでも「善い心を持ち・善い行い」をすることの大切さに気がきます」の教えを深くかみしめて、自分の『生き方』を考えてみましょう。

『<sup>ぶつじゆ</sup>佛<sup>むりよう</sup>壽の無量なることを聞いて <sup>き</sup>一切皆<sup>いっさいみなかんぎ</sup>歡喜す ～ <sup>いっさいぜんごん</sup>一切善根を具して <sup>もつ</sup>以て無<sup>むじょう</sup>上の

<sup>こころ</sup>心<sup>たす</sup>を助く』(二八六頁 終行)

【分別功德品 前半の要・かなめ】(P279・終2行/P206・終3行)

— 弥勒菩薩が言いました。「仏さまの寿命が不生不滅であることを聞いて、一切衆生は皆歡喜しました。～ その功德によって一切の人間が善根を具えるようになり、その善根が、無上道へ達したいという最終の願いを遂げるのに、大変役立つのでございます。」

『一切善根を具して 以て無上の心を助く』

(P281・終4行/P208・3行)

それならば、人間の向上の『究極の目標』は何でしょうか？《仏の境地》です。その境地は、われわれ凡夫にとっては、遠い遠い彼方(かなた)にあって、到底、行きつけそうには思われません。それでいいのです。行き着けそうにない境地であればこそ、それを目指してはるかな旅を続けることができるのです。どんなに遠くても、行く手に光り輝く世界があるのですから、一步一步に希望があるのです。一足(ひとあし)一足に勇気が湧(わ)くのです。暗黒の底なしの穴を覗くのに比べて、なんとという違いでしょう。

これが『仏寿(ぶつじゆ)』の不滅を知ることの大功徳なのです。

あなた自身の心で、よくよく思いめぐらしてみられることを、切にお勧め致します。

四信五品 (P293・6行/P216・終3行)

#### 《在世の四信(さいせのしん)》 — 仏の在世の徳行と功徳 —

- ・「一念信解(いちねんしんげ)」 仏の寿命が永遠であることをほんの一念でも信解することで得られる功徳は計り知れなく大きい。
- ・「略解言趣(りやくげごんじゆ)」 仏の寿命が無量であるという教えを理解できれば、その人は、仏の智慧の中で、全てが平等である『慧』を得ることができる。
- ・「広為他說(くわいたせつ)」 この教えを広く説くならば、その者は仏の智慧の中で、全ての違いを見抜くことのできる『智』を得ることができる。
- ・「深信観成(じんしんかんじょう)」 仏の無量寿を、ほんの一念ではなく、深くそれを信解するならば、その人は私が霊鷲山で多くの者たちに法を説いている私の姿を見ることができ。つまり、自分が住んでいる所に、いつも仏さまがいらっしゃることを確信するようになる。

#### 《滅後の五品(めつごごほん)》 — 仏の滅後の徳行と功徳 —

- ・「初随喜(しゆずいき)」 仏の滅度に、この教えを聞いて、疑うことなく素直に有難いと歡喜の心を起こすならば、それこそ、それが真の信仰の姿です。
- ・「読誦(どくじゆ)」 教えを読誦し、よく受持する者は、如来を肩に頂いているのです。
- ・「説法(せっぽう)」 教えを多くの人に説くならば、その人が得る功徳は、巨大な寺院・僧坊を無数寄進するよりも大きな功徳だと言える。
- ・「兼行六度(けんぎょうろくど)」 教えを受持し、読誦し、説法する行に兼ねて、『六波羅蜜』をも行ずる。しかし、『六波羅蜜』を完全に行ずることができず、「分に応じ」「機会に應じて」「できることからやっていく」という意味もあります。
- ・「正行六度(しやうぎょうろくど)」 完全に『六波羅蜜』を行じている人。ここまで来たら、最高の悟りを得るのも遠くない。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑧》

仏の滅後には、この「滅後の五品」が大切であると説かれています。  
— では仏の滅後にいる私は、この五つの徳行の中で、特に「何を心がけようと思うか？」 しみ締めてみましょう。

『<sup>ぶつし</sup>佛子此の地に<sup>じゆう</sup>住すれば<sup>すなわ</sup> 則ち<sup>こ</sup>是れ<sup>じゆう</sup>佛受用したもう<sup>そ</sup> 常に<sup>ましま</sup>其の中に<sup>きようぎょう</sup>在して<sup>きようぎょう</sup> 經行し

もしは<sup>も</sup>坐臥<sup>ざが</sup>したまわん』 (二九五頁 終二行)

(P352・7行/P265・2行)

尊いおことばです。仏さまは、仏の教えを心から信受している者を、本当の子と同様にお考えになりますから、仏子とおっしゃっておられるのです。

その仏子の住している所は、仏さまがご自分の住む場所としてくださるというのです。  
～ そういう人の所には仏さまの方からおいでになって一緒に住んでくださるというのです。

信仰者にとってこれほど嬉しい、有り難いことはありますまい。仏さまと共に住み、仏さまと共に起き、仏さまと共に眠りにつく…。誠に信仰生活の極致の法悦境(ほうえつきよ)というべきでありますよう。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑨》

仏さまの方からおいでになって一緒に住んでくださるという『佛子此の地に住すれば 則ち是れ佛受用(じゆう)したもう 常に其の中に在(ましま)して 經行し 若しは坐臥(ざが)したまわん』という経文を、あなたはどのように受け止めますか？  
しみ締めてみましょう。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のふいかえい まとめ》

今日の『分別功德品 第十七』の学びを通して、何を学び取ったか？  
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌